

豊田喜一郎生誕120年

豊田喜一郎 生誕120年

自動車の国産化に情熱

「大衆のための乗用車をつくり国を豊かにしたい」。乗用車の国産化に情熱を燃やしたトヨタ自動車創業した豊田喜一郎。今日、6月11日は喜一郎が生誕してから、ちょうど120年に当たる。今ではグループ世界生産・販売台数が1000万台を超え世界一の自動車メーカーに成長したトヨタ。創業から脈々と受け継がれてきた喜一郎の精神や思想が、今日のトヨタの強さの基となっている。

喜一郎は「織機の発明王」と言われた偉大な発明家である豊田佐吉の長男として1894年(明治27)6月11日に現在の静岡県湖西市で生を受けた。幼少期より父の工場

で多くの機械を身近にみながら成長した。東京帝国大学(現東京大学)工学部機械工学科を卒業後、1921年に現在のトヨタ自動車グループにつながる豊田紡織に入社した。

その後「G型自動織機」の開発、26年の豊田自動織機製作所(現豊田自動織機)設立と、織機事業を軌道に乗せる一方で国産自動車への思いを強めていく。

その後、豊田自動織機を重ね、豊田自動織機製作所の工場の片隅に自動車部を発足した。目標は米フォードモーターなど米国車と正面から戦える大衆自動車をつくること。佐吉からは「私は織機を発明しお国

を発明家や技術者ではなく経営者として育てようとしていた。しかし血は争えなかった。喜一郎は佐吉の目を盗んで図面を描くほどエンジンアとしての思いが強かった。その情熱、そして実力、ついには佐吉も折れ喜一郎のエンジンニアとしての活動を認めた。

そんな喜一郎が自動車に目を向けるきっかけとなったのが豊田紡織入社後まもなくの渡米だった。自動車があふれる光景を目の当たりにし「いつかは日本にも自動車の時代が来る」と確信し

製作所の業績が低迷し、多角化を進め会社の危機を乗り越えようとする中、喜一郎はその一環として、ひそかに自動車事業の計画をつくり始めた。本業の合間をぬって自動車やエンジンの研究

のために尽くした。お前は自動車をつくらせてお国のために尽くせ」と激励された。しかし当時の日本には自動車工業を興せる技術基盤がなかった。また自動車事業には莫大な資金が必要で、三井や三菱など大財閥ですら手を出せなかつたほど。豊田自動織機製作所が取り組むには、あまりにも危険で周囲の誰もが「無謀だ」と言った。それでも喜一郎はひるむことなく挑戦した。その情熱に多くの人の心が動かされ、喜一郎の周りには次第に優秀な技術者が集まってくるようになる。

36年には念願の大衆乗用車「トヨタA型乗用車」が誕生。37年にトヨタ自動車工業(現トヨタ自動車)を設立し、喜一郎は副社長に就任する。38年11月3日には挙母工場(現本社工場)を操業開始。喜一郎の夢であった国産乗用車の量産が始まった。トヨタは、この日を創立記念日に定めている。必要なモノが必要な時に必要な量だけつくるジャスト・イン・タイム(JIT)。トヨタの競争力の源泉とも言えるトヨタ生産方式を支える代表的な思想だ。喜一郎は挙母工場の操業開始当初から、すでにJITを提唱していた。喜一郎は当時「無駄と過剰のないこと。部分品が移動し循環していくについて待たせたりしないこと。ジャスト、インタイムに各部分品が整えられることが大切だと思います」と語っていた。

また喜一郎は「エンジンアは手を汚せ」などと現場重視も口を酸っぱくして説いていた。トヨタは実際に自分の目で見て、物事を考えるという「現地現物」を大事にしているが、これも喜一郎の思想が基礎になっている。

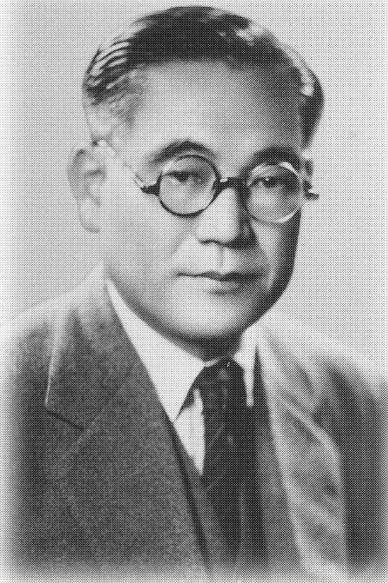
「大衆乗用車は、つくることより売ることの方が難しい」と考えていた喜一郎は販売体制の整備も進めた。そこでも販売店に対し「まずユーザーにむけておらおう。あなた方(販売店)がもうけるのはそのあと」と顧客第一の考えを徹底した。

41年にトヨタ自動車工業の社長に就任。50年の経営危機を前にしても「人は切らない」と頑張ったのが喜一郎だった。最後には希望退職を募り、労働争議に発展した際には責任を取って辞任するといふ潔い人物でもあった。その後、業績が回復し社長復帰が決まった矢先の52年3月27日に急逝した。

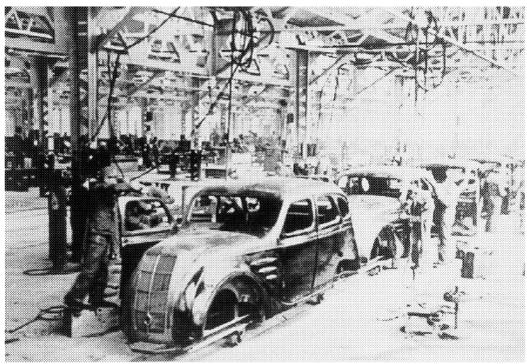
喜一郎のベンチャースピリットから始まったトヨタ。自動車にかけた夢と情熱、経営思想は後進に脈々と受け継がれ、現在の「もっといいクルマづくり」を目指すトヨタにしっかりと息づいている。

「大衆乗用車は、つくることより売ることの方が難しい」と考えていた喜一郎は販売体制の整備も進めた。そこでも販売店に対し「まずユーザーにむけておらおう。あなた方(販売店)がもうけるのはそのあと」と顧客第一の考えを徹底した。

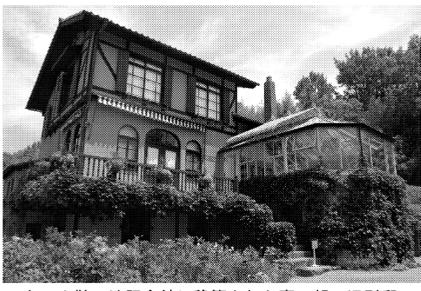
トヨタの社会貢献活動の原点は、創業前まで遡ります。1890年、創業者 豊田喜一郎の父・佐吉は、苦勞する母親の姿を見て、「豊田式木製人力織機」を発明しました。1925年には蓄電池の発明奨励のため、帝国発明協会に寄付を約束するなど、その生涯は人々の生活を豊かにするための支援に尽力するものでした。佐吉の精神は喜一郎へ受け継がれ、さらには今日のトヨタの社会貢献活動へとつながっています。すべての方々に笑顔になつていただける企業をめざして、私たちはこれからも、地域の社会課題の解決を通じて、「いい町・いい社会」づくりに取り組んでまいります。



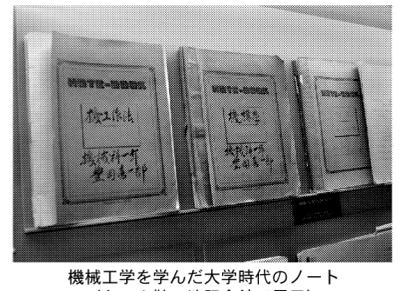
トヨタ自動車の創業者 豊田 喜一郎



夢だった国産乗用車の量産を始めた挙母工場



トヨタ鞍ヶ池記念館に移築された喜一郎の旧別邸



機械工学を学んだ大学時代のノート (トヨタ鞍ヶ池記念館で展示)

TOYOTA

変わらぬ想いで、
これからも。



トヨタ初の国産乗用車・トヨタAA型(1936年)